

### 智光僧侶と礼光僧侶

元興寺の発展には、智光の浄土曼荼羅が欠かせなかった。その曼荼羅の誕生に関する話は、まさに奇跡的なものであった。986年に書かれた『日本往生極楽記』に、その経緯が記されている。

智光法師（709-778）は河内（現在の大阪府南東部）に生まれたとされる僧である。8歳か9歳で三論宗に入門した。元興寺に來た時期は不明だが、礼光という僧と一緒に学んだことが知られている（年代不詳）。智光と礼光は学問への情熱を共有し、親交を深めた。ところがある日、礼光は突然言葉を発しなくなり、そのまま亡くなってしまった。

当然、智光は礼光の運命に悩み、彼に何が起こったのかと考え込んだという。ある夜、智光が寝ていると、礼光が夢に出てきた。礼光は、長い沈黙の間（＝言葉を発しなかった期間）に、片時も休まず浄土を思い描き、その修行によって浄土への往生を遂げたと説明した。夢の中で、礼光は智光を阿弥陀仏の前に連れて行き、浄土の素晴らしさを見せた。

智光は目を覚ますとすぐに、その光景を曼荼羅で描き始めた。画の手前、中央の小さな壇上に、阿弥陀仏の浄土で再会した自分と礼光の姿が描かれている。